



Slope DRR News Letter 02

2021年3月1日

自主防災組織の活性化による斜面災害減災力の強化事業
Capacity building of local community for slope disaster risk reduction

JICA Grass Root Program between JAPAN & VIETNAM

1. コロナ禍での工夫に悩む

キックオフミーティングを開けない。現地に行くことが困難な状況では、「そもそもプロジェクトの実効性を担保出来ないのではないか」と深刻に悩む日々が続いたが、実行計画を精査することで、「準備的な業務が沢山ある」、「地域側にお願ひできそうなもの」、「リモートでの意思疎通があれば進められそうなもの」と仕分けができそうに見えてきた。そこで、次の4点の工夫を行った。それは1) 私たち Slope DRR では、実施計画段階では PDM を下敷きに、四半期別・月別の行動・予算を緻密にプログラム化していたので、各アクティビティをブロック単位で動かすことが容易だった。例えば、コロナが直に影響するのが自明である人の行き来は、次年度以降に陣割と重点を移すこととしたように。2) もちろん、カウンターパートとタイムスケジュールを修正し、JICA に予算組み替えを行ってもらいリモートでの意思疎通をできる環境をも整えた。現場サイドで先行できる UAV ベースマッピングは地域住民にも興味をそそることである。3) 本プロジェクトで用いる基盤データは日本の技術によるものだったことは幸いした。パイロット地区での災害基盤地図、広域での斜面災害の潜在性に関する試作図の作成は順調に進めることが出来た。4) さらに、人事交流を伴わない業務では、「ちゃんと伝わるマニュアルの整備」が必要不可欠であることは言うまでもなく、例えば「紙芝居版の子供たち向け防災資料」をも作り始めた。

しかしながら、この工夫を行うことで今更ながら痛感したのは「ともに現場で調べあい語り合い共感する」ことの重大さである。リモートでは解ったような気にはなるが、実際に理解して使うようになったという確信にはどうしても「隔靴搔痒」の感に駆られる。次年度からはコロナ対策を実施して現地に向かうこととなる。

2. リモート環境での作業実態

1でまとめた行動工夫の事例を紹介します。UAVによる現場災害データの取得はパイロット地区の若者が助手を買って出るなど「対話型防災マップ作り」の良い兆しや、リモートによる日本側専門家によるチェックポイントの再確認などが実現しています。日本発の AW3D を用いた防災基本情報作成では、広域地すべり地形分布図 (1/25000) の試作図、パイロット地区 3 か所の内 1 か所での災害基盤地図 (1/5000) 試作図を作成し、相手側と共有を始めました。次年度の現地訪問が実現すれば、「何となく危ないかな」という懸念が「此処はこのような訳で危険であり、それはこのように危険を回避しよう」という対策構築に繋がられるでしょう。紙芝居では、Slope DRR のターゲットとなる水・土砂・樹木の山嵐 3 人組みと地域の対応をシナリオ化しています。

3. コロナ禍の継続を想定したプロジェクトの推進

ベトナムは、コロナ感染防止の優等生とも言われていました。特に国際間の出入国管理は厳格です。しかし、最近各地で数十人規模の新規感染が確認されているようです。コロナの対策に完璧は求められないのかもしれませんが。他方ワクチン接種は世界の趨勢です。先は見えないので

すが、このニュースレターで示した業務をすればするほど、今更ながら現場で一緒に汗を流すことの大事さをヒシヒシと感じています。新年度早々には、先ずキックオフ会議をリモートで実施する準備を進めています。同時に現地調査の準備も粛々と進めています。

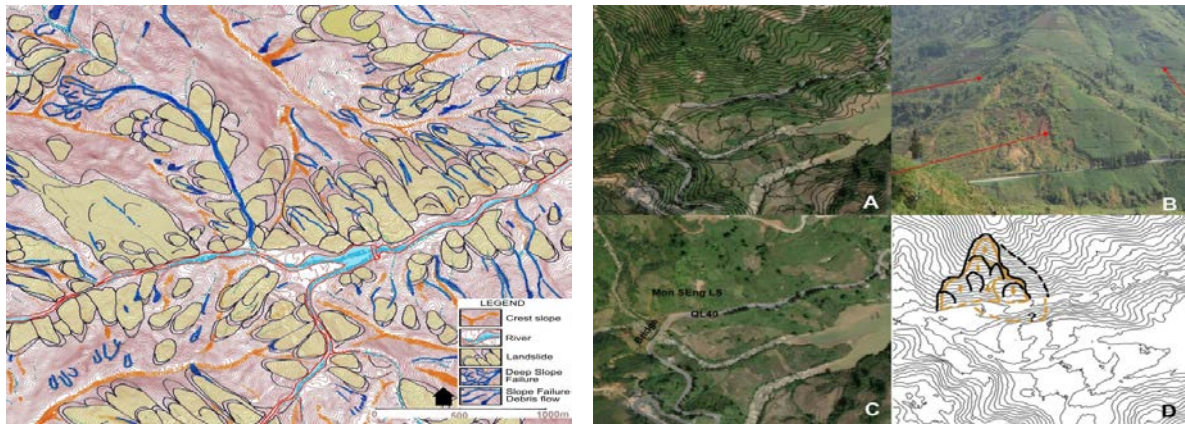


図1. 左；一つのパイロット地区(ラオカイ省サバ郡トルンチャイ地区)の斜面災害基盤地図(1/5000)試作図(部分)、その一部を、A:AW3D2m DEM から作成した 10m 等高線図をオルソ画像に重ねた。B:同箇所でも活発な地すべりと国道などの斜め写真、C:オルソ画像、D:等高線図に活発な地すべりを表示した。

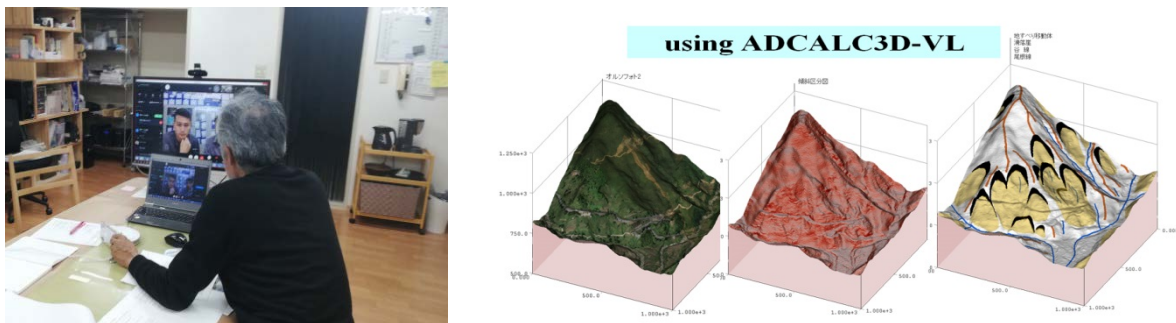


図2. リモート会議では、Adcalc3D 簡易版で斜面特性情報の一括管理・表示・解析の手ほどきを行う。

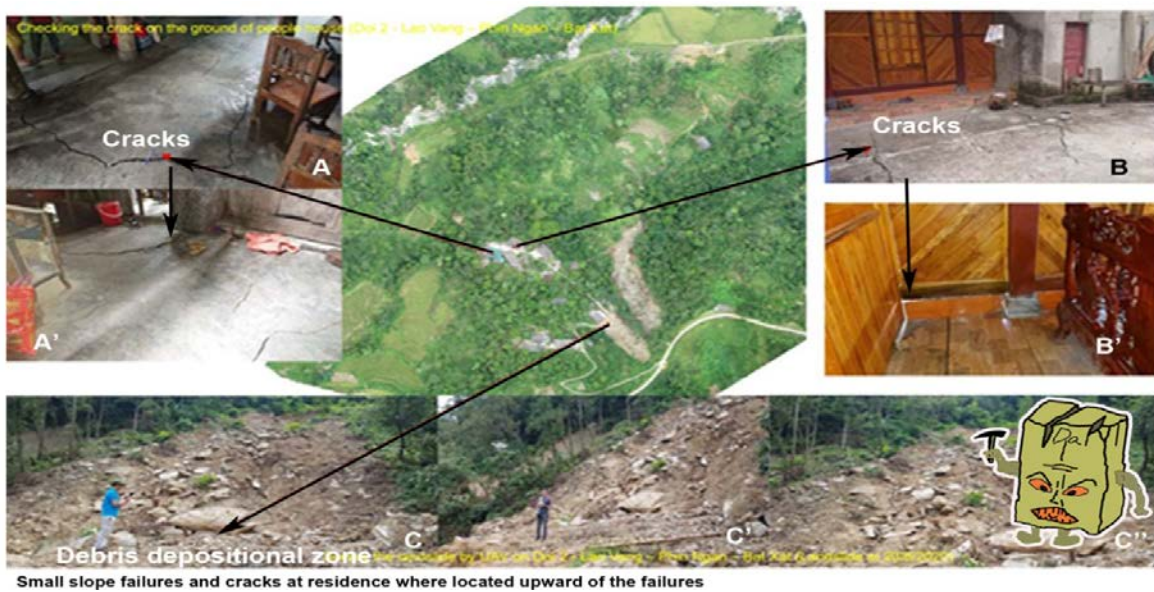


図3. 日本側のリモート指導により、現地側技術者による踏査の状況。どんな現象が何処に、どのように確認できるかの把握が大事。これで斜面災害発生の危険と回避可能性を考える。中央写真図は UAV 画像。